

【翻訳】

章学誠校讎学論文訳注 (三) 「論修史籍考要略」

文科大学目録学研究會

(＊樋口 泰裕・渡邊 大・宇賀神 秀一・

王 連旺・荒川 悠・村越 充朗)

本稿は清・章学誠「論修史籍考要略」の訳注である。訳出に当たっては嘉業堂本章氏遺書(卷十三「校讎通義外篇」所収)を底本とし、内藤湖南旧蔵鈔本章氏遺書、浙江図書館排印本章氏遺書などと校合し、王重民『校讎通義通解』(上海古籍出版社、一九八七年)および倉修良『文史通義新編新注』(浙江古籍出版社、二〇〇五年)を参照した。字句の異同は必要と思われる場合のみ訳注において言及する。

「論修史籍考要略」は『史籍考』編纂に際して、その概要・方針をまとめたもの。乾隆五十二(一七八七)年の冬、章学誠は河南巡撫畢沅のもと、開封で『史籍考』の編纂にあたることになった。『史籍考』は、朱彝尊『經義考』にならい、その範圍を史籍に推し拡げた解題目録として企画された^三。しかし、畢沅の転任や同僚との行き違い、また、章学誠自身の生活苦もあり、作業は難航し、企画はやがて頓挫することとなる。嘉慶三(一七九八)年には新たに浙江巡撫謝啓昆の後援を得たものの、翌年、謝啓昆が广西巡撫に転任すると、事業はふたたび停頓し、嘉慶六(一八〇二)年、章学誠はその完成を見ることなく世を去った。その後、道光二五(一八四五)年、南河河道総督兼漕運総督潘錫恩が学者を組織して増訂した『史籍考』の定稿は、未刊行のまま、清書写本として、畢沅、謝啓昆の原稿本とともに、

* ひぐち やすひろ

文科大学文学部中国語中国文学科

うがじん しゅういち

つくば国際大学東風高等学校

あらかわ ゆう

筑波大学大学院

わたなべ だい

文科大学文学部中国語中国文学科

おう れんおう

浙江大学日本文化研究所

むらこし みちお

筑波大学大学院

潘錫恩の郷里涇県の家中に蔵されていたというが、咸豐六（一八五六）年、火災で焼失してしまった^四。「史籍考」には、章学誠をはじめ、畢沅・洪亮吉・凌廷堪・武億・謝啓昆・錢大昭・陳鱣・胡虔・袁鈞・張彦聞、潘錫恩・許瀚・劉毓崧・包慎言・呂基賢など、多くの学者が関わったが、未刊のまま、原稿・定稿ともに灰燼に帰したため、その全容を窺う術はなくなり、その概略を示すものとして、「論修史籍考要略」のほか、同じく章学誠の「史考釈例」「史籍考総目」、また、許瀚「擬史籍考校例」^五などが残るのみである。

「論修史籍考要略」は、畢沅のもとにあった乾隆五十三（一七八八）年に、「史考釈例」は謝啓昆のもとにあった嘉慶三（一七九八）年に、それぞれ「史籍考」編纂の方針を示すためにまとめられたものであり、両者の比較からは章学誠の当初の構想と十年を経たのちの理論面・実践面における成熟をみるることができる^六。なお、「史籍考総目」によれば「史籍考」の分類・類目は以下の通りで、十二部、五十五目からなる^七。

- 一、制書二卷
- 二、紀伝部（正史一四卷 国史五卷 史稿二卷）
- 三、編年部（通史七卷 断代四卷 記注五卷 図表三卷）
- 四、史学部（考訂一卷 義例一卷 評論一卷 蒙求一卷）
- 五、碑史部（雜史一九卷 霸国三卷）
- 六、星歴部（天文二卷 歴律六卷 五行二卷 時令二卷）
- 七、譜牒部（專家二六卷 総類二卷 年譜三卷 別譜三卷）
- 八、地理部（総載五卷 分載一七卷 方志一六卷 水道三卷 外裔四卷）
- 九、故事部（訓典四卷 章奏二卷 典要三卷 史書二卷 戸書七卷 礼書三卷 兵書二卷 刑書七卷 工書四卷 官曹三卷）
- 十、目錄部（総目三卷 経史一卷 詩文即文史五卷 図書五卷 金石五卷 叢書三卷 釈道一卷）
- 十一、伝記部（記事五卷 雜事一二卷 類考一三卷 法鑑三卷 言行三卷 人物五卷 別伝六卷 内行三卷 名姓二卷 譜録六卷）
- 十二、小説部（瑣語二卷 異聞四卷）

共三百二十五卷^八

以下、提要として、内藤湖南『支那史学史』十二清朝の史学「浙東学派の史学」より、「論修史籍考要略」に関する記述を引用する。

章学誠は畢沅の客であつた時、史籍考を書きかけたが、それも出来上らなかつた。今日では単に序録の一部とその他の大体的方針を書いたものが文集に見えてゐるだけである。これは朱彝尊の經義考の体裁に倣つて作らうとしたもので、即ち史籍の解題である。その方針は、(一) 古逸を存することである。これは古く經書の出来る前に經書の材料となつた書があるべき筈である。六經並に左伝・国語その他に残つてゐる古史の逸文、例へば左伝に引用してある軍志・周志、大戴礼所引の丹書・青史の類である。章学誠は王応麟の玉海の芸文門の意を取つて、大体如何なる書が存したかを示さうとしたのである。(二) 家法を辨ずることである。これは即ち漢の劉向劉歆のやつた校讐の学である。史には通史・断代史・分国の書、衆を集めて官修せる書、その他色々のものがあり、各々書方、家法を異にしてゐるが、それを校讐の法にて辨别しようとするのである。(三) 剪裁の法を立てることである。史籍考を作るに就て無用の冗文のないやう、各々の歴史の肝要な所を明らかにせしめようとするのである。(四) 逸篇を採ることである。これは古逸の如く上古のものではなくして、隋より以前の書で今日亡佚したものを取るのである。隋書經籍志考証のやうな考である。(五) 嫌名を辨ずることである。例へば史記といふ名の如き、太史公の時はなく、後になつて出来たものである。旧五代史は當時は五代史と称したのであるが、後に五代史記が出来て、それを新五代史と称したのに対してかく称するに至つたものである。これらのまぎららしい名称を辨じようとするのである。(六) 經部に通ずることである。古は經史の別がなかつたが、後になつて二つに分れた。故に今日經書中にも史料として取扱ふべきものがある。それで朱彝尊の經義考の中に出てゐるものでも史学に必要なものは史籍考の中に出さうといふのである。(七) 子部を擇ぶことである。これも亦た子書の中で歴史に係あるものを採つて史籍考に記さうといふのである。(八) 集部を載することである。これも同じく古人の文集中には随分歴史と関係あるものがあるから、それを採らうといふのである。(九) 方志即ち地方志を選ぶことである。(十) 譜牒を擇ぶことである。(十一) 考異を精しく書くことである。(十二) 板刻を詳にすることである。これは板刻の源流を明かにすることである。(十三) 制書を尊ぶことである。即ち歴代の天子の実録・宝訓・方略の如き欽定の書を尊ぶ。(十四) 禁例を明らかにすることである。書籍の禁止されたものはこれを明らかにする。

（十五）採摭を詳にすべきことである。現存の書はその叙目凡例をぬき書きし、亡逸の書は群書の記載を捜し出し、出来るだけ詳しく材料を蒐めて長編を作り、然る後これを適当に刪つて史籍考を作るといふのである。章学誠は以上の如き方針で史籍考を作るつもりであつたのであるが、これは大事業である。又章学誠の立てたこの分類が適当であるかどうか疑問である。且つ又章学誠は博識といふのでもなく、又考証学にもあまり長じて居らぬから、彼がかかるものを作つても、それが考証学をする人の如くうまく成功したかどうか問題である。序録・分類だけ出来て本文が出来なかつたのが幸ひであつたかも知れぬ。とにかくこれは大計画であつたが、その中に畢沅が死んで、章学誠は湖北に永く居られなかつたために中止となつてしまつた。勿論この義例によつて、後の者がやればやれるが、非常に多くの書を見る便宜のある人でなければ不可能である。

本訳注では冒頭の総説と十五則を十六の段落にわけて、各々原文・訓読・現代語訳・訳注の順にまとめた。

〔注〕

一 「史籍考」の成立については、胡適・姚名達「章實齋先生年譜」（商務印書館、一九二九年）、羅炳綿「史籍考修纂的探討」（食貨史学叢書『清代學術論集』、食貨出版社、一九七八年）、上掲「校讎通義通解」、林存陽「史籍考」編纂始末辨析」（『故宮博物院院刊』、二〇〇六年一期）、喬治忠「史籍考」編纂問題的幾點考析」（『史學史研究』、二〇〇九年二期）を参照。

二 「經義考」三百卷は、二十九項目（御注勅撰・易・書・詩・周礼・儀礼・礼記・通礼・樂・春秋・論語・孝經・孟子・爾雅・群經・四書・逸經・楚經・擬經・師承・宣講・立学・刊石・書壁・鏤板・著録・通説・家学・自序）を立て、經書に関する書籍の撰者・書名・卷数を著録し、卷数の異同および存・佚・闕・未見の別を記し、原書の序跋はもとより、原書に関する記述・言及を諸資料から搜集・摘録し、適宜、案語を付す輯録体の提要である。

三 「上畢制府書」に「學誠始侍鈴轡、在丁未（乾隆五十二年）之仲冬。其端自永清周尹發之。周尹見秀水朱氏作『經義考』、未及於史、以謂學塗之闕、仰知閣下心羅二十三史之古、文綜八十一家之奇、而學誠於史學略窺涯涘、可以備鈔胥而佐丹鉛、是以觀樓於閣下、而督學誠以行役。」とある。

四 光緒十八（一八九二）年に記された潘駿文「乾坤正氣集跋」に「先公尚有增訂『史籍攷』一書、亦與斯集同時讐校。係因畢秋帆・謝蘊山兩先生原本爲卷三百卅有三、原書採擇未精頗多複漏。先公因延旌德呂文飾・日照許印林（瀚）・儀徵劉伯山（毓松）・同

邑包孟開（慎言）諸先生、分類編輯刪繁補缺、仍照朱竹垞「經義考」定爲三百卷。而補錄存佚之書、視原稿增四之一、詳審頓覺改觀。寫成清本、待付手民、乃與藏書同歸一炬、並原稿亦不復存。」とある。姚名達「中国目録学史」（商務印書館、一九五七年版）の王重民「後記」参照。

五 袁行雲『許瀚年譜』（齊魯書社、一九八三年）第一八四頁参照。山東図書館蔵道光二十六年（一八四六）年許瀚手稿「擬史籍考校例」は山東文獻集成第二輯第二一冊に所収されている。

六 『史籍考』に関する章字誠の言及は、「報孫淵如書」（嘉業堂本『章氏遺書』卷九）、「與邵二雲書」（同九卷）、「與邵二雲書」（同二三卷）、「與洪釋存博士書」（同二三卷）、「與孫淵如書」（同二九卷）、「上朱中堂世叔」（同二八卷）、「與邢會稽」（同二八卷）、「與趙山陰」（同二八卷）、「與汪龍莊簡」（同二九卷）、「與阮學使論求遺書」（同二九卷）、「上畢制府書」（同補遺）、「又上朱大司馬書」（同補遺）、「又與朱少白」（同補遺續）などの諸篇にみえる。

七 王重民によればこの十二部、五十五目、三百二十五卷という数字は、章字誠の定稿におけるものであり、「史考釈例」に「分十二綱、析五十七目」とあるのは当初の計画、謝啓昆「復孫淵如觀察」に「五百餘卷」（『樹經堂文集』卷四）とあるのは作業段階における大まかな見積りであるとする。なお、上掲『章実斎先生年譜』によれば「史籍考総目」は馬叙倫が楊見心が所蔵する未刊行の一卷から抄出したものという。

八 計算上は三百二十三卷である。

キーワード…章字誠 史籍考 論修史籍考要略 史考釈例 校讎

「論修史籍考要略」

総説

【原文】

校讎著録^{〔注二〕}、自古爲難。二十一家之書^{〔注三〕}、志典籍者僅有漢・隋・唐・宋四家^{〔注四〕}、餘則闕如。『明史』止録有明一代著述、不録前代留遺、非故爲闕略也、蓋無專門著録名家勒爲成書、以作憑藉也^{〔注五〕}。史志^{〔注六〕}篇幅有限、故止記部目^{〔注七〕}、且亦不免錯訛^{〔注八〕}。私家記載、間有考訂、僅就耳目所見、不能悉覽無遺。朱竹垞氏『經義』一考、爲功甚鉅。既辨經籍存亡、且採羣書敘録、間爲案斷、以折其衷、後人溯經藝者所攸賴矣^{〔注九〕}。第類例間有未盡、則創始之難^{〔注十〕}。而所收止於經部、則史籍浩繁、一人之力不能兼盡、勢固不能無待於後人也。今擬修『史籍考』、一倣朱氏成法、少加變通、蔚爲鉅部、以存經緯相宣之意。

【訓読文】

校讎著録、古より難しと爲す。二十一家の書、典籍を志す者僅かに漢・隋・唐・宋の四家有り、餘は則ち闕如たり。『明史』は止だ録して明一代の著述のみ有り、前代の留遺を録さざるは、故より闕略を爲すに非ざるなり、蓋し著録を専門とする名家の勒して成書を爲し、以て憑藉と作す無ければなり。史志は篇幅に限り有り、故に止だ部目を記し、且つ亦た錯訛を免れず。私家の記載は、間々考訂有るも、僅かに耳目の見る所に就き、悉覽して遺無きこと能わず。朱竹垞氏『經義』一考、功を爲すこと甚だ鉅いなり。既に經籍の存亡を辨じ、且つ羣書の叙録を採り、間々案斷を爲して、以て其の衷を折り、後人の經藝に溯る者の攸賴する所なり。第だ類例に間々未だ尽くさざる有るは、則ち創始の難きなり。而して収むる所は經部に止まる、則ち史籍は浩繁にして、一人の力もて兼尽すること能わず、勢い固より後人に待つ無きこと能わず。今『史籍考』を擬修するに、一に朱氏の成法に倣い、少しく變通を加え、蔚として鉅部を爲し、以て經緯相宣ぶる意を存す。

【現代語訳】

校讎と著録は、古くから難しいものであった。二十一史で典籍を記録するものはわずかに『漢書』『隋書』『唐書』『宋書』の四家のみでその他には欠けている。『明史』が明一代の著述にとどまって、前代から伝わった典籍を著録しないのは、元々、省略しようとしたわけではなく、おそらくは、依拠すべき、著録を専門とする一廉の人物がまとめた目録がなかったためであろう。史志は篇幅に限りがあるため、部目書名を記すにとどまり、また、誤りも免れない。一方、私家の記載には時折考訂はあるものの、個人の見聞の範囲にとどまり、諸資料を周覧して遺漏なしというわけにはいかない。その点朱竹垞氏の『経義考』があげた功績は非常に大きい。経籍の存亡を弁じただけでなく、群書の叙録を採録し、時折、考察を加えて諸説を折衷し、経藝を遡ろうとする後人の拠り所となっている。ただ類別と体例に間々最善といえないものがあるのは創始の難しさというものであろう。またその収録範囲は経部にとどまっているが、史籍は浩繁であり、個人の力ではやりきれるものではなく、自然、後継者を待つということ

になる。今、『史籍考』編纂にあたっては、朱氏のたてた規範にならない、少しく変更を加え、蔚然たる鉅帙をなし、縦糸たる経書と横糸たる史書が相互に引き立てあう意義をとどめようとするものである。

【訳注】

〔一〕「校讎著録」は、書籍の分類・配列等を通して学術の類別と源流を闡明し目録に反映すること。校讎通義叙に「校讎之義……部次條別、將以辨章學術、考鏡源流」とある。

〔二〕「二十一史」は、明の万暦年間に国子監が刊行した「史記」「漢書」「後漢書」「三國志」「晉書」「宋書」「南齊書」「梁書」「陳書」「魏書」「北齊書」「周書」「隋書」「南史」「北史」「新唐書」「新五代史」「宋史」「遼史」「金史」「元史」をいう。「日知錄」監本「二十一史」に「宋時止有十七史、今則並宋、遼、金、元四史爲二十一史。」とある。

〔三〕「漢・隋・唐・宋四家」は、『漢書』藝文志、『隋書』經籍志、『旧唐書』經籍志、『新唐書』藝文志、『宋史』藝文志をいう。

〔四〕「明史」藝文志は明一代の著述のみを対象として前史に著録するものを掲載しない。その経緯について、総序は「四部之目、昉自荀勗、晉宋以來因之。前史兼錄古今載籍、以爲

皆其時柱下之所有也。明萬曆中、修撰焦竑修國史、輯經籍志、號稱詳博。然延閣廣內之藏、竑亦無從偏覽、則前代陳編、何憑記錄。區區掇拾遺聞、冀以上承隋志。而贗書錯列、徒滋譌舛。故今第就二百七十年各家著述稍為釐次、勒成一志。凡卷數莫考、疑信未定者、寧闕而不詳云。」と、焦竑『國史經籍志』の不備を指摘する（『國史經籍志』については『四庫提要』が「其書叢抄舊目、無所考核、不論存亡、率爾濫載。古來目錄惟是書最不足憑」と酷評している）。一方、北京圖書館藏旧抄本万斯同『明史稿』藝文志に冠せられているという倪燦『明史藝文志序』（『明史藝文志・補編・附編』（商務印書館、一九五九年）による）には「前代史志、皆錄古今之書、以其爲中秘書藏、著一代之所有。今文淵之目、既不可憑。且其書僅及元季、三百年作者缺焉、此亦未足稱記載也。故特更其例、去前代之陳編、紀一朝之著述。」とあり、『文淵閣書目』の不足に言及している。また、王鴻緒『明史稿』藝文志の序には「明季秘書已亡、則前代陳編、無憑記載。第就二百七十年各家著述、足成一志。爰取士大夫家藏目錄、稍爲釐次。凡卷數莫考、疑信未定者、寧闕而不詳云。」とあり、私家の蔵書目錄をよりどころとしたという。ここにいう私家の蔵書目錄は『明史』編纂にあずかって『明史藝文志稿』を撰した黃虞稷の『千頃

堂書目』とされるが、両者の関係や成立の先後については諸説ある（井上進『「千頃堂書目」と『明史藝文志』稿』（『東洋史研究』五七・二、一九九八年）参照。なお、『四庫提要』史部正史類二には「明史」藝文志が一代限りの著述を収録範圍としたことについて「藝文志惟載明人著述而前史著錄者不載、其例始於宋孝王『關中風俗傳』。劉知幾『史通』又反覆申明於義爲允。唐以來弗能用、今用之也。」と評価している。〔五〕「史志」とは、正史の藝文志・經籍志のほか、それらを補訂したもの、もともと藝文志・經籍志をおかない正史にかわって後人が撰したもの、その他史書に収められる目錄などというが、ここでは正史の藝文志・經籍志が念頭におかれている。〔六〕「止記部目」とは、旧唐志以降、部目と書名を主要な構成要素とし、総序はともかく、大小類の序や提要を欠くことをいう。

〔七〕例えば、『宋史』藝文志は、宋代に編まれた四部の国史藝文志をもとにして、その重複を削り、史館に蔵されていた寧宗以後の書物を補って、九千八百部、十一万九千九百七十二卷を著録したが、後に黃虞稷・倪燦・盧文弨が『宋史藝文志補』を撰して、六百七十八家、一万二千七百四十二卷を補った。『四庫提要』は「宋史藝文志、訛漏顛倒、瑕隙百出。於諸史志中、

最爲叢勝。」(目録類「崇文総目」項)と酷評している。

〔八〕『四庫提要』は「每一書、前列撰人姓氏・書名・卷數。其卷數有異同者、則註某書作幾卷。次列存・佚・闕・未見字。次列原書序跋、諸儒論說、及其人之爵里。彝尊有所考正者、即附列案語於末。……上下二千年間。元元本本。使傳經原委。一一可稽。亦可以云詳贍矣。」(目録類「經義考」と、「經義考」の体例をまとめ、その成果を高く評価している。

〔九〕『四庫提要』は「惟序跋諸篇、與本書無所發明者、連篇備錄、未免少冗。……彝尊是書、乃以專說一篇者、附錄全經之末、遂令時代參錯、於例亦爲未善。……至所註佚闕未見、今以四庫所錄校之、往往其書具存、彝尊所言、不盡可據。」(目録類「經義考」として、内容とは無関係の序跋まで引くために冗長であること、(繫辭伝や洪範など特定の篇に関する)專論を別にまとめているために時代の先後が入り混じっていること、存佚に関する記述が不完全であること、などを『經義考』の瑕玷として挙げている。また、孫詒讓「温州經籍志序例」では、資料を引用する際に削除・修正を加えること、佚文を引用する際にその書名のみを記し、出典を示さないことなどを『經義考』の欠点としている。

第一段(古佚書は存すべきこと)

【原文】

一曰古逸宜存。史之部次後於經、而史之原起實先於經^{〔注二〕}。『周官』外史掌三皇五帝之書^{〔注二〕}、蒼頡嘗爲黃帝之史^{〔注三〕}、則經名未立而先有史矣。後世著錄、惟以『史』『漢』爲首、則『尚書』『春秋』尊爲經訓故也^{〔注四〕}。今作『史考』、宜具原委、凡『六經』『左』『國』周秦諸子所引古史逸文、如『左傳』所稱『軍志』『周志』^{〔注五〕}、『大戴』所稱『丹書』『青史』之類^{〔注六〕}、略倣『玉海』藝文之意^{〔注七〕}、首標古逸一門、以討其原。

【訓読文】

一に曰わく古逸は宜しく存すべし。史の部次は經に後る、而るに史の原起は実に經に先んず。『周官』外史は三皇五帝の書を掌り、蒼頡は嘗て黃帝の史爲り、則ち經名未だ立たざるに而して先ず史有り。後世の著錄、惟だ『史』『漢』を以て首と爲すは、則ち『尚書』『春秋』尊ばれて經訓と爲るが故なり。今『史考』を作るに、宜しく原委を具うべし、凡そ『六經』『左』『國』周秦

諸子の古史逸文を引く所、『左伝』称する所の『軍志』『周志』、『大戴』称する所の『丹書』『青史』の類の如き、略『玉海』藝文の意に倣い、首に古逸一門を標し、以て其の原を討ねんとす。

【現代語訳】

第一に古佚書は存すべきこと。（書目即ち學術分類において）史部は經部の後ろに位置するが、史の起源は実は經よりも前にあった。『周官』では外史が三皇五帝の書を管掌することになっていたし、倉頡は黃帝の史官であつたのだから、經という名称がまだないうちにまず史があつたわけである。後世の著録においては、『史記』『漢書』を史部の冒頭としているが、それは（史籍の淵源である）『尚書』『春秋』を尊重して經訓（經なる訓）をとしたためである。今、『史籍考』を作るに当たつては、源流と委曲をそなえるべく、六經、『左伝』、『国語』、周秦諸子が引用する古史の佚文、たとえば、『左伝』にみえる『軍司』『周志』、『大戴礼』にみえる『丹書』『青史』の類は、ほぼ『玉海』藝文の意にならつて、冒頭に「古逸」の一門を設け、その源流を究めること

とする。

【訳注】

〔一〕 章学誠は、所謂六經皆史説を唱え、經書はもともと先王の政典であつて、職掌毎に史が管理していたと考えていた。また、『文史通義』經解上に、「六經不言經……夫子之時、猶不名經也……至於官師既分、處士橫議、諸子紛紛、著書立說、而文字始有私家之言、不盡出於典章政教也。儒家者流、乃尊六藝而奉以爲經、則又不獨對傳爲名也。荀子曰『夫學始於誦經、終於習禮』。莊子曰『孔子言治詩・書・禮・樂・易・春秋六經』、又曰『繇十二經、以見老子』。荀莊皆出子夏門人、而所言如是、六經之名、起於孔門弟子亦明矣。」とあるように、經という名称についても、戦国時代にうまれたと考えていた。

〔二〕『周禮』春官・大司馬に「外史、掌書外令、掌四方之志、掌三皇五帝之書」とある。

〔三〕 右の賈公彦疏に「『世本』作云『蒼頡造文字』。蒼頡、黃帝之史、則文字起於黃帝。今此云五帝之書爲可、而云三皇之書者、三皇雖無文、以有文字之後、仰錄三皇、時事故云掌三皇之書也。」とある。

〔四〕「經訓」は、第七段（經部は通すべきこと）に「今六藝以

聖訓而尊」とある「聖訓」と同じ意味であろう。『五礼通考』に「自秦漢以來奉宗廟者不本先王之經訓。」とある。

〔五〕「軍志」は、『左伝』僖公二十八年に「軍志曰允當則歸、又曰知難而退、又曰有德不可敵」とあり、その杜預注に「軍志、兵書。」とある。また、宣公十二年には「軍志曰先人有奪人之心。」、昭公二十一年伝「軍志有之、先人有奪人之心、後人有待其衰。」とある。

「周志」は、『左伝』文公二年に「周志有之、勇則害上、不登於明堂。」とあり、その杜預注に「周志、周書也。」と、孔穎達疏に「志者、記也。謂之周志、明是周世之書、不知其書何所名也。」とある。

〔六〕「丹書」は、『大戴礼』武王踐阼に「（武王）召師尚父而問焉曰昔黃帝顓頊之道存乎。……師尚父曰在丹書。」とある。

〔七〕王応麟『玉海』藝文志は「正史」の前に「古史」を置いて、諸資料にみえる古史に関する記述をもとに、「虞史」「唐虞史官典籍」「帝王輔佐篇籍」「夏殷春秋・太史図法・殷冊書典籍」「周志」「周記」「周考・周紀」「周史記」「周書」「周諸侯史記・魯史記・魯史策書・三國史記」「周百二十國寶書」「周載」「晋春秋・楚書・鄭書」「魯紀年」「孔子三史」「八題記」「青史氏記」「秦記」の項目を立てている。

乾隆五十三（一七八八）年に記された「與洪禪存博士書」〔章氏遺書〕卷二二）には「三月朔日爲始、排日編輯『史考』、檢閱『明史』及『四庫』子部目錄、中間頗有感覺、增長新鮮、惜不得足下及虛谷・仲子諸人相與縱橫其議論也。然繼續久之、會當有所發洩。不知足下及仲子此時檢閱何書。史部提要已鈔畢否。『四庫』集部目錄、便中檢出、俟此間子部閱畢送上、即可隨手取集部發交來力也。『四庫』之外、『玉海』最爲緊要、除『藝文』史部無庸選擇外、其餘天文・地理・禮樂・兵刑各門、皆有應採輯處、不特藝文一門已也。」とある。

第二段（家法は弁すべきこと）

〔原文〕

二曰家法宜辨。校讎之學與著錄相爲表裏。校讎類例不清、著錄終無原委。舊例以二十一家之言同列正史〔注二〕、其實類例不清。馬遷乃通史也、梁武『通史』〔注三〕、鄭樵『通志』之類屬之。班固斷代專門之書也、華・謝・范・沈諸家屬之。陳『志』分國之書也、『十六國春秋』『九國志』之類屬之〔注四〕。南北史斷取數代之書也、歐薛『五

代』諸史屬之。『晉書』『唐書』集聚官修之書也。^{注四} 宋・遼・金・元、諸史屬之。家法分明、庶幾條理可貫、而究史學者可以溯源流矣。他若編年・故事・職官・儀注之類、折衷歷代藝文史部子目、以次區分可也。

【訓読文】

二に曰わく家法は宜しく辨ずべし。校讎の学と著録とは相い表裏を為す。校讎の類例清ならざれば、著録も終に原委無し。旧例は二十一家の言を以て同に正史を列す、其れ実は類例清ならず。馬遷は乃ち通史なり。梁武『通史』、鄭樵『通志』の類は之に属す。班固は断代専門の書なり、華・謝・范・沈の諸家は之に属す。陳『志』は分国の書なり。『十六国春秋』『九国志』の類は之に属す。南北史は数代を断取する書なり。欧薛『五代』諸史は之に属す。『晋書』『唐書』は聚官を集めて修むる書なり。宋・遼・金・元の諸史は之に属す。家法分明なれば、條理貫く可く、而して史学を究むる者の以て源流を溯る可きを庶幾す。他の編年・故事・職官・儀注の類の若きは、歴代の藝文史部の子目を折衷し、次を以て区分すれば可なり。

【現代語訳】

第二に家法は弁すべきこと。校讎の学は著録と表裏をなしており、校讎の類例が明晰でないと、著録も結局淵源委曲が不明になってしまう。旧例が二十一史という語によつて正史を同列に扱っているのは、実は類例の明晰でないものである。司馬遷（の家法）は通史であり、梁武帝の『通史』、鄭樵の『通志』の類はこれに属す。班固は断代して一王朝を専門に扱う書であり、華嶠『後漢書』、謝沈『後漢書』、范曄『後漢書』、沈約『晋書』の諸家はこれに属す。陳寿の『三国志』は分国の書であり、『十六国春秋』『九国志』の類はこれに属す。南北史は数代を切り取った書であり、歐陽脩、薛居正の新旧『五代史』はこれに属す。『晋書』『唐書』は、大勢の史官によつて編修された書である。宋・遼・金・元の諸史はこれに属す。家法がはっきりすれば、（著録も）條理が一貫し、史学を考究しようとする者も源流に遡ることが期待できる。その他の編年、故事、職官、儀注の類は、歴代の藝文志や史部の子目を折衷して、順序をもつて区別すればよい。

【訳注】

【一】『七録』が国史部と称するのを例外として歴代の書目はほぼすべて「正史」を設けているが、章学誠は体例や編纂の仕方が異なる諸史を正史という枠組みで一括りにすることにより異を唱えたのであった。しかし、「史考釈例」には「正史一門、畢宮保原稿但稱紀傳、而紀傳中又分通史（自注：『史記』是也、又附入梁武『通史』、鄭樵『通志』、今應改入別史）、斷代（自注：班范以下是也）、集史（自注：南北史是也）、國別（自注：『三國志』是也）、不免繁碎。今以學校頒分二十四史爲主、題爲正史（自注：應將原稿改正）、……」とあり、畢沅のもとでは「正史」ではなく「紀伝」と題し、「通史」「斷代」「集史」「國別」の小類に分かれていたのが、謝啓昆のもとでは「紀伝部」の下位分類として「国史」「史稿」とともに「正史」が復活していたことがわかる。

【二】「通史」について、『梁書』武帝紀下に「造『通史』、躬製贊序、凡六百卷」とある。『隋書』經籍志では「通史」四百八十卷。梁武帝撰。起三皇、訖梁」とする。また、劉知幾『史通』六家には「梁武帝又勅其羣臣、上自太初、下終齊室、撰成『通史』六百二十卷。其書自秦以上、皆以『史記』爲本、而別採他説、以廣異聞。至兩漢已還、則全錄當時紀傳、而上下通達、臭味相依。又吳蜀二主皆入世家、五胡及拓拔氏、列於夷狄傳。大抵其體皆如『史記』、其所爲異者、唯無表而已。」とある。隋志・旧唐志では正史に、新唐志では正史類・集史家に著録する。

【三】「十六國春秋」の編纂について、『北史』崔鴻伝に「鴻弱冠便有著述志。見晉・魏前史、皆成一家、無所措意。以劉

元海・石勒・慕容儁・苻健・慕容垂・姚萇・慕容德・赫連屈孑・張軌・李雄・呂光・乞伏國仁・禿髮烏孤・李嵩・沮渠蒙遜・馮跋等並因世故、跨僭一方、各有國書、未有統一、鴻乃撰爲十六國春秋、勒成百卷、因其舊記、時有增損褒貶焉。」とある。隋志では霸史、旧唐志・新唐志では僞史に著録される。

「九國志」について、『玉海』藝文・雜史「治平十國志」条に「真宗時、知制誥路振采五代僭偽具（楊行密）、唐（李昇）、前蜀（王建）、後蜀（孟知祥）、南漢（劉隱）、北漢（劉崇）、閩（王潮）、楚（馬殷）、吳越（錢鏐）九國君臣行事、撰九國志（以擬崔鴻十六國春秋）、爲世家、列傳四十九卷（振字子發、永州人）。其孫綸又增高氏（季興）、爲十國志。治平元年六月辛酉（二十七日）、綸上之。詔付史館（九國志五十卷、增荆南高氏、實十國也。見氏志云、九國志五十一卷）」とある。郡齋・直齋は僞史類に著録する。

【四】晋書の編纂について、『玉海』藝文・正史「唐御撰晋書」條に「（中興）書目」を引いて「太宗以『晋史』何法盛等十八家制作雖多、未能盡善、於是敕史官更加纂錄、採正典與舊說數十部、兼引偽史十六國書、爲百三十篇」命來濟・李淳風・李義府等十三人分掌著述、令狐德棻・敬播等四人考正類例。凡例多出敬播、天文・律歷則李淳風爲之、惟宣・武紀陸・王傳論、太宗自爲之、故總題曰御撰云。當時修史者多文辭之士、好采詭異以廣聞見、學者譏之。」とある。

第三段（摘録には原則あるべきこと）

【原文】

三曰剪裁宜法。史部之書倍於經部。卷帙多寡、約略計之、僅與朱氏『經考』相去不遠。蓋一書之中、但取精要數語、足以該括全書足矣。篇目有可考者、自宜備載。其序論題跋、文辭浮汎與意義複沓者、概從刪節、但記作序作跋年月銜名、以備參考而已^{〔註二〕}。按語亦取簡而易明、無庸多事敷衍、庶幾文無虛飾、書歸有用。

【訓読文】

三に曰わく剪裁は宜しく法あるべし。史部の書は經部に倍す。卷帙の多寡は、約略之を計るに、僅かに朱氏『經考』と相い去ること遠からず。蓋し一書の中、但だ精要の數語を取りて、以て全書を該括するに足れば足る。篇目の考う可き者有らば、自ら宜しく備載すべし。其の序論題跋の、文辭浮汎なると意義の複沓なる者とは、概ね刪節に従い、但だ作序作跋の年月と銜名のみを記し、以て參考に備うるのみ。按語も亦た簡にして易明なるを取り、多事敷衍を庸いる無し、文は

虚飾無く、書は有用に帰せんことを庶幾すればなり。

【現代語訳】

第三に摘録には原則あるべし。史部の書物は經部に倍するが、卷帙の多寡の大凡を計るに、『史籍考』は朱彝尊『經籍考』とそれほど変わらない。一書の内容をまとめるには、その中核となる數語を取り出し、全体を概括できれば十分なのである。篇目に考察すべきものがあれば当然全て載せるべきだし、序論・題跋の文辭が輕薄で書物の内容とかけ離れているものは、あらかた削り、序跋の年月・職官・氏名のみを記して參考に供すべきである。案語も簡明を旨として細々と敷衍しない。文は虚飾なく書は有用たることを願つてのことである。

【訳注】

〔二〕題跋等の扱いについては、本訳注「総論」の訳注九を参照のこと。

第四段（逸篇は採録すべきこと）

【原文】

四曰逸篇宜採。古逸之史、已詳首條^{〔注二〕}。若兩漢以下至於隋代、史氏家學尙未盡泯^{〔注三〕}。亡逸之史、載在傳志、崖略尙有可考。其遺篇逸句、散見羣書稱引、亦可寶貴。自隋以前、古書存者無多、耳目易於周遍、可倣王伯厚氏採輯鄭氏『書』『易』『三家詩訓』之例^{〔注三〕}、備錄本書之下^{〔注四〕}。亦朱竹垞氏采錄緯候逸文之成法也^{〔注五〕}。此於史學所補、實非淺鮮。

【訓読文】

四に曰わく逸篇は宜しく採るべし。古逸の史は、已に首條に詳らかにす。兩漢より以下隋代に至るが若きは、史氏の家學尙お未だ尽くは泯びず。亡逸の史、載せて伝志に在るは、崖略尙お考うべきもの有り。其の遺篇逸句の、羣書の称引に散見するものも、亦た宝貴すべし。隋より以前、古書の存する者多きこと無く、耳目も周遍し易ければ、王伯厚氏の鄭氏『書』『易』と三家詩訓を採輯するの例に倣い、本書の下に備録す

べし。亦た朱竹垞氏の緯候逸文を采録するの成法なり。此れ史學に於て補う所、實に淺鮮に非ず。

【現代語訳】

第四に逸篇は採録すべきこと。古逸の史書については首條で詳述した。兩漢から隋代にいたるまで、史を専門とする者たちの家學はまだ滅びきつていなかった。亡逸した史書で伝志に記載のあるものは、あらましをまだ考察できる。その遺篇佚文の群書の引用に散見するものも貴重である。隋以前の古書で伝存するものは多くなく、耳目も行き渡りやすいので、王応麟が鄭玄『鄭氏古文尚書』『周易鄭康成注』や『詩攷』で韓詩・魯詩・齊詩の三家詩を輯佚した例にならって、本書の下に備録すべきで、やはり朱彝尊が緯候佚文を採録した際にたてた規範である。これが史學において補うものは、実に浅からぬものがある。

【訳注】

〔二〕第一段（古佚書は存すべきこと）の「一曰古逸宜存」以下をさす。

〔二〕専門の学、一家の言を尊ぶ章学誠は、多数の史官による

修史が始まり、様々な分野の文章を収録する文集が盛行した唐代に史学が衰退したと考えている。たとえば、「申鄭」

に「子長・孟堅氏不作、而専門之史學衰。陳・范而下、或得或失、粗足名家。至唐人開局設監、整齊晉・隋故事、亦名其書為一史。而學者誤承流別、不復辨正其體。」とあり、「答各問上」に「唐後史學絶、而著作無專家。」とあり、「方志立三書議」に「書」曰詩言志。古無私門之著述、經子諸史、皆本古人之官守。詩則可以惟意所欲言。唐宋以前、文集之中無著述。文之不為義解經學、傳記史學、論撰子家諸品者、古人始稱之為文。其有義解、傳記、論撰諸體者、古人稱書、不稱文也。」とあり「永清縣志文徵序例」に「唐宋以還、文集之風日熾、而専門之學杳然。於是一集之中、詩賦與經解並存、論說與記述同載、而裒然成集之書、始難定其家學之所在矣。」とある。また、第八段（集部は裁つべきこと）も参照のこと。

〔三〕王応麟『玉海』所収。

〔四〕本箇所では両漢から隋以前の古書の佚文は各書の提要とともにまとめる方針が示されているが、乾隆五十六（一七九一）年に記された「與邵二雲書」（『章氏遺書』卷一二）には次のように記されている。

逢之寄來『逸史』、甚得所用。至云據逸之多、有百餘紙不止者、難以附入『史考』、但須載其考證、此說亦有理。然弟意以為蒐羅『逸史』、為功亦自不小、其書既成、當與余仲林『經解鉤沈』可以對峙、理宜別為一書、另刻以

附「史考」之後。「史考」以敵朱氏『經考』、「逸史」以敵余氏『鉤沈』、亦一時天生瑜・亮、洵稱藝林之盛事也。

但朱・余二人、各自為書、故朱氏『經考』、本以著錄為事、附登緯候逸文。余氏『鉤沈』、本以搜逸為功、而於首卷別為五百餘家著錄。蓋著錄與蒐羅二事、本屬同功異用、故兩家推究所極、不侔而合如此。今兩書皆出余山先生一人之手、則又可自為呼吸相應、較彼二家更便利矣。

夫史籍遺篇逸句、不講著錄部次、則無所附麗、更不比余氏『經解』、猶有本經白文、可以作間架也。今為酌定凡例、自唐以前諸品「逸史」、除蒐采尚可成卷帙者、仿叢書例、另作敘跋較刻、以附「史籍考」後、其零章碎句、不能成卷帙者、仍入「史籍考」內、以作考證。至書之另刻、不過以其卷頁累墜、不便附於各條之下、其為體裁、仍是搜逸、以證著錄、與零章碎句之附於各條下者未始有殊、故文雖另刻、必於本條著錄之下、注明另刻字樣、以便稽檢。鴻編鉅製、取多用宏、創例僅得大凡、及其從事編摩時、遇盤根錯節、必須因時準酌、例以義起、窮變通久、難以一端而盡。凡事不厭往復熟商。今茲所擬、不識高明以為何如。

これによれば、もともと章宗源によつて輯佚された漢以降隋以前の史籍佚文を「史籍考」の各条に取り込む計画であつたが、分量と資料の性格から、「史籍考」と連繫しながら輯佚書を独立させる方向へ計画が変更されたことがわかる。

〔五〕『經義考』は卷二六三から二六七までの五卷を「慈緯」として、緯書を著録し、目錄等にみえる当該書に関する記

述とともに案語において諸資料に残る佚文を引用している。

第五段（紛らわしい名称は弁別すべきこと）

【原文】

五曰嫌名宜辨^{〔注二〕}。『史記』之名起於後世、當時止稱『司馬遷書』^{〔注二〕}。『漢書』因東京而橫加『前漢』、固俗稱也^{〔注三〕}。五代之書、薛氏稱『五代史』、歐陽則稱『新五代史記』^{〔注四〕}。至於『漢記』之有『東觀』、異乎劉・賈之所敘錄^{〔注五〕}。曹氏自有『魏書』^{〔注六〕}、異於陳子之分子目^{〔注七〕}。古人之書、或一書歧名、或異書同名者多矣、皆於標題之下、注明同異名目、以便稽檢。仍取諸書名目、倣『佩文韻府』之例、依韻先編檔簿、以俟檢數、庶幾編次之時、乃無遺漏複疊之患。

【訓読文】

五に曰わく嫌名は宜しく辨ずべし。『史記』の名は後世に起こる、當時は止だ『司馬遷書』とのみ称す。『漢書』東京に因りて『前漢』を横加するは、固より俗称

なり。五代の書、薛氏は『五代史』と称し、歐陽は則ち『新五代史記』と称す。『漢記』の『東觀』有るに至るは、劉・賈の敘録する所に異なれり。曹氏に自ら『魏書』有り、陳子の分かつ子目に異なれり。古人の書、或いは一書名を歧かち、或いは異書同名なる者多し、皆な標題の下に於て、同異の名目を注明し、以て稽檢に便たらしむ。仍ねて諸書の名目を取り、『佩文韻府』の例に倣い、韻に依りて先ず檔簿を編み、以て檢數を俟つ、編次の時、乃ち遺漏複疊の患い無きを庶幾すればなり。

【現代語訳】

第五に紛らわしい名称は弁別すべきこと。『史記』の名は後世に起こったもので、當時はただ『司馬遷書』と呼ばれていた。『漢書』に、東京にちなんで妄りに『前漢』と付け加えるのも、もとより俗称である。五代の書は、薛居正は『五代史』と称し、歐陽脩は『新五代史記』と称している。『漢記』の上に「東觀」を加えるのも劉珍、賈逵の叙録するところとは異なっている。曹魏には自ら『魏書』があるが、陳寿の分けた子目（三

国志」の魏書」とは別物である。古人の書には一書が名を異にし、異書が名を同じくするものが多くある。（そこで『史籍考』では）全て標題の下に書名の異同を注記し検索の便を図る。さらに諸書の名称は『佩文韻府』の例にならって、韻に従ってまず書名一覽を編み、検索・対照できるようにする。編次の際に遺漏や重複の恐れがないようにと考えてのことである。

【訳注】

【一】「辨章學術」「考鏡源流」は、互著や別裁によってこそ可能になると考えていた章学誠にとつては、同書異名、異書同名などによって、校讎・著録に混乱が生じることは許されなかった。書名一覽を編む工夫もそこから出たものである。『校讎通義』巻一「辨嫌名第五」参照。

【二】『漢書』芸文志・春秋家には『太史公』百三十篇が著録されている。「司馬遷書」の語自体は、『文選』李善注や『後漢書』李賢注などにみえるが、それらは司馬遷の書簡文などを指し、いずれも『史記』そのものを指しておらず、章学誠がどのような例を念頭に置いているのかはよくわからない。『史記』太史公自序に「凡百三十篇、五拾五萬六千五百字、為太史公書。」とあるように、司馬遷自身は自著を「太史公書」と称しており、古くは『太史公』（『漢書』藝文志、「太史公記」）『漢書』楊惲伝、「太史記」（『風

俗通義』などとも呼ばれていた。「史記」と称する古い例は、荀悦（一四五―二〇九）の『漢紀』で、その孝平皇帝紀に「據太史公司馬遷史記」と、孝武帝紀に「幽而發憤、遂著史記」とみえる。また、後漢・桓帝の永寿元（二五五）年に建てられた「東海廟碑」（『隸釈』巻二）には、「闕者秦始皇所立、名之秦東門闕。事在史記。」とある。

【三】『漢書』巻一〇〇「叙伝」に「故採纂前記、綴輯所聞、以述漢書」と班固自らが記すように、「漢書」の書名は早くから定まっており、『隋書』經籍志、「旧唐書』經籍志といった史志では「漢書」として著録している。「前漢書」の書名で著録する目録に、「郡齋讀書志」、「文獻通考」などがある。

【四】現行の薛正居編『五代史』は、四庫館臣の邵晋涵等らによって編まれた輯本である。晁公武『郡齋讀書志』には「五代史一百五十卷」とあり、その解題に「開寶中、詔修梁・唐・晉・漢・周書。」とみえることから、「梁唐晉漢周書」が書名とみなされることもある。一方、歐陽脩等編『新五代史記』は、『郡齋讀書志』では「新」字を付していないが、『文獻通考』では「新五代史記七十五卷」とする。

【五】劉は劉珍、賈は賈逵をいう。『東觀漢記』の成書およびそれと劉珍、賈逵の関係については余嘉錫『四庫提要辨證』巻五「東觀漢記」篇を参照のこと。

【六】『隋書』經籍志には、『魏書』四十八卷、晋司空王沈撰とある。【七】『晋書』王沈伝に「正元中、遷散騎常侍・侍中・典著作。與荀顗、阮籍共撰魏書、多為時諱、未若陳壽之實錄也。」とみえる。王沈の『晋書』はすでに散逸したが、『三國志』

裴松之注に引かれている。『隋書』経籍志には四十八巻として著録されているが、『旧唐書』経籍志では四十四巻、『新唐書』芸文志では四十七巻、『通志』では四十八巻と、著録する目録によつて巻数に若干の異同がある。

第六段（経部は通すべきこと）

【原文】

六曰経部宜通。古無經史之別、六藝皆掌之史官、不特『尚書』與『春秋』也^{〔注二〕}。今六藝以聖訓而尊、初非以其體用不入史也^{〔注三〕}。而經部之所以浩繁、則因訓詁・解義・音訓而多、若六藝本書、即是諸史根源、豈可離哉。今如易部之『乾坤鑿度』、書部之『逸周諸解』、『春秋』之『外傳』、『後語』、韓氏傳『詩』、戴氏記『禮』、俱與古昔史記相爲出入、雖云已入朱氏『經考』、不能不於『史考』溯其淵源、乃使人曉然於殊途同歸之義^{〔注三〕}。然彼詳此略、彼全此偏、主賓輕重、又自有權衡也。

【訓読文】

六に曰わく経部は宜しく通ずべし。古は經史の別無

し、六藝は皆な之を掌るは史官にして、特だ『尚書』と『春秋』とのみならず。今六藝は聖訓を以て尊はるるも、初めは其の体用を以て史に入らざるに非ず。経部の浩繁なる所以は、則ち訓詁・解義・音訓の多きに因る、六藝本書の若きは、即ち是れ諸史の根源、豈に離るる可けんや。今、易部の『乾坤鑿度』、書部の『逸周諸解』、『春秋』の『外傳』、『後語』、韓氏伝『詩』、戴氏記『礼』の如きは、俱に古昔の史記と相い出入を為せば、已に朱氏『經考』に入ると云うと雖も、『史考』に於て其の淵源に溯らざること能わず、乃ち人をして殊途同帰の義に曉然たらしむ。然れど彼詳なれば此略し、彼全ければ此偏る、主賓輕重は、又た自ら權衡有り。

【現代語訳】

第六に経部は通すべきこと。古には經史の別はなく、六藝はすべて史官の管掌であり、『尚書』と『春秋』に限ったことではなかった。今は六藝を聖訓であることをもって尊んで（経部に括って）いるものの、元来その本体・作用の区別をもって史部に入らなかつたわけではない。経部が浩繁であるのは、訓詁・解義・

音訓が夥しいためであり、六藝そのものは諸史の根源にほかならないのだから、どうして『史籍考』において切り離すことができようか。今、易部の『乾坤鑿度』、書部の『逸周書』に関する諸注釈、『春秋』の外伝とされる『国語』、『春秋後語』、『韓詩外伝』、『礼記』、『大戴礼記』など、いずれも往古の史記（史官の記録）と相互に異同・関連があるものは、すでに朱彝尊の『経義考』に採録されているが、『史籍考』においてもその淵源を遡らないわけにはいかず、そうしてこそ「道を殊にするものの帰する所を同じくする」という意義をはっきりさせることができるだろう。とはいえ、あちらが詳細であればこちらは簡略に、あちらが遍く扱えばこちらは偏るというように、主客軽重はまた自ずから均衡というものがあるろう。

【訳注】

- 【一】第一段（古佚書は存すべきこと）の注一を参照。
 【二】「体用」は、本体と作用、また原理と応用をいう。六藝は先王の政典であり、史官によって管掌されていたものである。そのような経書を体用という観点から（原理を説くものとみなして）史書と切り離してはならないというのが、

章学誠の立場である。

- 【三】『周易』繫辭伝下に「天下同歸而殊塗、一致而百慮。」とあるのにもとづく。孔穎達疏には「言天下萬事終則同歸於一、但初時殊異其塗路也。」とある。司馬談「六家要指」や『漢書』藝文志諸子略序などにも引用され、その影響のもと、諸学折衷の態度をとる章学誠も時折このことばを取りあげる。

第七段（子部は選択すべきこと）

【原文】

七曰子部宜擇^{注二}。諸子之書多與史部相爲表裏、如周官典法、多見於『管子』『呂覽』。列國瑣事、多見於『晏子』『韓非』。若使鉤章鈎句、附會史裁、固非作書體要。但如『官圖』『月令』『地圓』諸篇之鴻文鉅典、『儲說』『諫篇』之排列記載、實於史部例有專門、自宜擇取要刪、入於篇次、乃使求史事者無遺憾矣。

【訓読文】

七に曰わく子部は宜しく択ぶべし。諸子の書は多く史部と相い表裏を爲す、『周官』の典法の如きは、多

く『管子』『呂覽』に見ゆ。列国の瑣事は、多く『晏子』『韓非』に見ゆ。若し鉤章鉤句して、史裁に附会せしむれば、固より作書の体要に非ず。但だ『官図』『月令』『地圓』諸篇の鴻文鉅典、『儲説』『諫篇』の排列記載の如きは、実は史部に於て、例として専門有り、自ら宜しく扨取要刪して、篇次に入れ、乃ち史事を求むる者をして遺憾無からしめん。

【現代語訳】

第七に子部は選択すべきこと。諸子の書は多く史部と表裏をなしている。例えば『周官』の典章・法規は、多く『管子』『呂覽』にみえている。また、列国の瑣事は、多く『晏子』『韓非子』にみえている。それらの一々をほじくり出して史書の記載にこじつけるのはもとより著作の大事ではない。しかし、『官図』『月令』『地圓』など諸篇の巨著大典、『儲説』『諫篇』に収載された記録は、実は史部においてそれらを専ら扱う部類が立てられているのである。当然取捨選択の上それらを篇次に入れ、史事を求める者に遺憾のないようにしなければならない。

【訳注】

【一】六藝は、戦国にいたると師承を失って、諸子へ流れたと考える章学誠にとつては、諸子の中にも別裁等の手段により「史籍考」に著録すべき部分があると考えていた。「校讎通義」「別裁第四」「焦竑誤校漢志第十二」参照。

第八段（集部は裁すべきこと）

【原文】

八曰集部宜裁。漢魏六朝史學、必取專門文人之集、不過銘・箴・頌・誄・詩・賦・書・表・文檄諸作而已。唐人文集間有紀事、蓋史學至唐而盡失也。及宋元以來、文人之集傳記漸多、史學文才混而爲一、於是古人專門之業、不可問矣^{【注一】}。然人之聰明智力、必有所近、耳聞目見、備急應求、則有傳記誌狀之撰、書事紀述之文、其所取用、反較古人文集徵實爲多。此乃史裁本體、因無專門家學、失陷文集之中、亦可惜也。是宜取其連篇累卷入史例者、分別登書。此亦朱氏取『洪範五行傳』於曾・王文集之故事也^{【注二】}。

【訓読文】

八に曰わく集部は宜しく裁つべし。漢魏六朝の史学は、必ず専門文人の集に取るも、銘・箴・頌・誄・詩・賦・書・表・文檄の諸作に過ぎざるのみ。唐人の文集間々紀事有るも、蓋し史学は唐に至りて尽く失す。宋元以来に及び、文人の集に伝記漸く多し、史学文才混じて一と為り、是に於て古人専門の業、問う可からず。然れど人の聰明智力、必ず近き所有り、耳聞目見、急に備え求めに應じて、則ち伝記誌状の撰、書事紀述の文有り、其の取用する所、反て古人文集の徵実に較べて多しと為す。此れ乃ち史裁の本体なれど、専門家学無きに因りて、文集の中に失陷するは、亦た惜しむ可きなり。是れ宜しく其の連篇累卷の史例に入る者を取りて、分別して書に登す。此れも亦た朱氏の『洪範五行伝』を曾・王文集に取るの故事なり。

【現代語訳】

第八に集部は裁つべきこと。漢魏六朝の史学は、必ず専門文人の集を取りあげたものの、銘・箴・頌・誄・詩・賦・書・表・檄文などの諸作にすぎない。唐人の

文集には間々紀事があるものの、おそらく史学は唐に至って尽く失われてしまったのであろう。宋元以降、文人の集に伝記がしだいに増えたが、史学と文才は混じてひとつとなり、ここに古人における専門の学業は、問うことができなくなった。しかしながら人間の耳目や智力には必ず近いところがあるために、聞いたこと見たこと、あるいは急場しのぎや必要に應じてものした、伝記や誌状の撰、記録や論述の文があり、そこから採用するものは、古人の文集における徵実よりも多い。これこそ史裁（史事を裁断すること）の本体であるが、専門・家学がなかったために、（本来置かれるべき目録の適切な部類に著録されることなく、そのまま）文集の中に陥ることになってしまったのは、また惜しむべきである。そこで数多の作品の中で史例に入るものは、それぞれ別出して『史籍考』に載せるのがよい。これもまた朱彝尊が『洪範五行伝』について、曾鞏、王安石の文集から採用したという故事がある。

【訳注】

〔一〕 第四段（逸篇は採録すべきこと）の注二参照。

【二】曾鞏『元豊類稿』卷一〇に「洪範伝」があり、王安石『臨川集』卷六五にも「洪範伝」があるのを、朱彝尊が『經義考』卷九五および卷九六に著録したことをいう。

第九段（地方志は選択すべきこと）

【原文】

九曰方志宜選。既作『史考』、凡關史學之書、自宜鉅細無遺、備登於錄矣、乃有不得不去取者、府州縣志是也。其書計數盈千、又兼新舊雜採、不下三千^{【註】}餘種、而淺俗不典、迂謬可怪、油俚不根、猥劣可憎者、殆過半焉。若胥吏簿書、經生策括、猶足稱爲彼善於此者矣。是以言及方志、搢紳先生每難言之。又其書散在天下、非一時人力所能彙聚、是宜僅就見聞所及、有可取者稍爲敘述、無可取者僅著名目。不及見者亦無庸過爲搜尋、後人亦得以量^{【註】}其所不及也。

【訓読文】

九に曰わく方志は宜しく選ぶべし。既に『史考』を作せば、凡そ史学に関わる書、自ら宜しく鉅細遺無く、

備に録に登すべきなるも、乃ち去取せざるを得ざる者有り、府州縣志是れなり。其の書計數すれば千に盈ち、又た新旧兼ねて雜採なるは、三千餘種を下らず、而も淺俗典ならずして、迂謬怪しむ可き、油俚不根、猥劣憎む可き者、殆ど半ばを過ぐ。胥吏の簿書、經生の策括の若きも、猶お称して彼此より善き者と爲すに足る。是を以て言いて方志に及ぶは、搢紳先生も毎に之を言ひ難し。又た其の書散じて天下に在れば、一時人力の能く彙聚する所に非ず、是れ宜しく僅かに見聞の及ぶ所に就きて、取る可き者有らば稍叙述を爲し、取る可き者無くんば僅かに名目を著す。見るに及ばざる者も亦た過ぎて搜尋を爲すを庸ること無し、後人も亦た以て其の及ばざる所を量るを得。

【現代語訳】

第九に地方志は選択すべきこと。『史籍考』を編む以上、およそ史学に関する書籍は、当然鉅細漏らさず尽く著録すべきである。それでも取捨せざるをえないのが、府州県に関する地方志である。その数は千を超え、新旧入り混じっているものは三千余種を下らない。

浅薄卑俗で常ならぬもの、迂腐謬妄で怪しむべきもの、出鱈目で根拠のないもの、低劣で憎むべきものが、ほぼ半ばを過ぎてゐる。胥吏の帳簿や、書生の（科挙用にまとめた）經史、時務策の）虎の巻の方が、まだましだということもできよう。したがって地方志といえど、縉紳先生には常々語りたいものである。さらに地方志は天下に散在しており、短期の人手で収集できるものではないから、見聞のおよぶ範囲に限って、取るべきものがあれば少しく叙述し、取るべきものがなければ書名だけを著録する。見聞の及ばないものは過度に搜索する必要もなく、後人もその（搜索の）及ばない範囲を推測することができよう。

【訳注】

【一】原文は「十」字に作る。王重民が「十」を「千」の誤りとするのに従う。

【二】内藤湖南旧藏鈔本章氏遺書は「量」字を囲って、欄外に「諒」字を記す。王重民は「諒字較好」とする。本稿では「量」字のままで解した。

第十段（譜牒は略すべきこと）

【原文】

十曰譜牒宜略。方志在官之書、猶多庸劣。家譜私門之記、其弊較之方志、殆又甚焉。古者譜牒掌於官、而後世人自爲書、不復領於郎令史故也。其徵求之難、甚於方志、是亦不可得而强索者矣。惟於統譜類譜、彙合爲編。而專家之譜、但取一時理法名家、世宦巨族、力之所能及者以次列之、仍著所以不能遍及之故、以待後人之別擇可耳。

【訓読文】

十に曰わく譜牒は宜しく略すべし。方志は官に在るの書なるも、猶お多く庸劣なり。家譜は私門の記にして、其の弊之を方志に較ぶれば、殆ど又た焉より甚だし。古は譜牒は官に掌られ、而して後世人ごとに自ら書を為し、復たび郎令史に領せられざるが故なり。其の徵求の難は、方志より甚だし、是れ亦た強いて索むるを得べからざる者なり。惟だ統譜類譜に於ては、彙合して編を為す。而して專家の譜は、但だ一時の理法

名家を取り、世宦巨族は、力の能く及ぶ所の者次を以て之を列し、仍ねて遍く及ぶこと能わざる所以の故を著し、以て後人の別に択ぶを待てば可なるのみ。

【現代語訳】

第十に譜牒は省略すべきこと。地方志は官製の書物であるのにその多くが庸俗低劣である。家譜は私門の記録であり、その弊陋なること地方志より一層甚だし。昔時、譜牒は官の職掌であつたが、後世、人ごとに著述をなすようになると、尚書郎、令史に管領されることもなくなつたためである。譜牒の捜求が難しいことは地方志よりも甚だしく、やはり無理に搜索することはできない。ただ統譜や類譜は、聚収してまとめる。專家の譜は、ただ一時の理法名家のみを採り、代々官僚を出し勢力を誇る一族は、力の及ぶ範囲のものを順序にしたがって配列し、さらに収載が遍く行き渡らない理由を記して後人が別に選択できるようしておけばよい。

第十一段（考異は精密にすべきこと）

【原文】

十一曰考異宜精。史籍成編、取精用宏注二、其功包經・子・集而其用同『經義考』矣。然比類既多、不能無所牴牾、參差同異、勢不能免。隨時編次之際、取其分歧互見之說、賅而存之、俟成書之後、別爲『考異』一編、庶幾無罅漏矣。

【訓読文】

十一に曰わく考異は宜しく精なるべし。史籍編を成すは、精を取るに宏きを用いる、其の功は經・子・集を包ねて其の用は『經義考』に同じ。然れども比類既に多し、牴牾する所無きこと能わず、參差同異も、勢免るること能わず。隨時編次の際、其の分歧互見の説を取り、賅そまえて之を存し、成書の後を俟ちて、別に『考異』一編を為し、罅漏無きを庶幾す。

【現代語訳】

第十一に考異は精密にすべきこと。史籍目録を編む

ということとは、広範な素材から精華を取り出すということであり、（それによって）功用は経・子・集を兼ね、その作用は『經義考』と同じくなる。しかしながら比類が多い以上、齟齬が生じざるを得ないし、ばらつきや異同も勢い免れない。その都度、編次の際に、異論や重出する説をすべてまとめて保存しておいて、本篇完成后、別に『考異』一篇を作成し、遺漏のないように願うこととする。

【訳注】

「〔一〕取精用宏」とは広範な材料から精華を取り出すこと。「左伝」昭公七年に「蕞爾國、而三世執其政柄、其用物也弘矣、其取精也多矣。」とあるのにもとづく。

第十二段（板刻は詳細に記述すべきこと）

【原文】

十二曰板刻宜詳。朱氏『經義考』後有刊板一條、不過記載刊木原委、而惜其未盡善者、未載刊本之異同也^三。金石刻畫、自歐・趙・洪・薛以來、詳哉其言之

矣^三。板刻之書、流傳既廣、訛失亦多、其所據何本、較訂何人、出於誰氏、刻於何年、款識何若、有誰題跋、孰爲序引、板存何處、有無缺訛、一書曾經幾刻、諸刻有何異同、惜未嘗有人倣前人『金石錄』例而爲之專書者也^三。如其有之、則按錄求書、不迷所向、嘉惠後學、豈不遠勝『金石錄』乎。如有餘力所及、則當補朱氏『經考』之遺、『史考』亦可以例倣也。

【訓読文】

十二に曰わく板刻宜しく詳らかにすべし。朱氏『經義考』の後に刊板の一條有るも、刊木の原委を記載するに過ぎず、惜しむらくは其の未だ善を尽くさざる者は、未だ刊本の異同を載せざるなり。金石刻畫、欧・趙・洪・薛自り以來、詳らかなる哉其の之を言うや。板刻の書、流傳既に広く、訛失も亦た多し、其の拠る所は何本なるか、較訂は何人なるか、誰氏に出づるか、何年に刻せらるるか、款識は何若、誰の題跋有る、孰か序引を爲す、板は何処に存するか、缺訛は有りや無しや、一書曾經て幾たび刻せらるるか、諸刻に何の異同有るか、惜しむらくは未だ嘗て人の前人『金石錄』の例

に倣いて之が専書を為す者有らざるなり。如し其れ之れ有らば、則ち録を按じて書を求むるに、向かう所を迷わず、後学を嘉恵すること、豈に遠く『金石録』に勝らざらんや。如し餘力の及ぶ所有らば、則ち当に朱氏『經考』の遺を補うべし、『史考』も亦た例を以て倣う可きなり。

【現代語訳】

第十二に板刻は詳細に記述すべきこと。朱氏の『經義考』には後ろの方に刊板の一条があるが、刊本の沿革を記すのみで、惜しいことに最善は尽くされず、刊本の異同を載せていない。金石刻画については、歐陽脩・趙明誠・洪遵・薛尚功以来、詳述されてきた。版本は流伝も広く誤りも多い。底本はどれか、校訂者は誰か、誰の手元から出たものか、何年の刻か、款識はどうか、誰の題跋があるか、誰が序引を作っているか、板木の所在、誤刻の有無、何度印刷されたのか、諸版にどのような異同があるのか、など、残念ながら、これまで『金石録』の例にならって版本のために専著をなした者はいなかった。もしこのようなものがあれば、

その目録によつて書物を求めて、迷うところはなくなる。後学を益するという点では『金石録』を凌駕するに違いない。余力が及べば、朱氏『經義考』の遺漏を補うべきであり、『史籍考』も『金石録』を例として倣うのが良い。

【訳注】

〔一〕『經義考』卷二九三には「鏤板」があり、諸史料に見える刊刻についての記事を収録している。

〔二〕宋代以降、金石研究が進み、歐陽脩『集古録』、趙明誠『金石録』、洪遵『泉志』、薛尚功『歷代鐘鼎彝器款識法帖』などが著された。例えば、越明誠『金石録』は、碑文の撰者、抄写者を挙げ、碑文を史書や家譜など諸史料と対照し、考訂を加え、『集古録』など先行研究にも言及している。例えば、卷二八の「唐元結碑」の尾跋には、「顔魯公撰並書。案『唐書』列伝、結、後貌常山遵十五世孫、而碑與『元氏家録』皆云十二世、蓋『史』之誤。又碑與『元和姓纂』皆云『結高祖名善禪』、而『家録』作『善禪』、未知孰是也。」とあり、卷二九の「唐虞城令李公去思頌」の尾跋には、「李白撰、王通書。碑側云『元和四年二月重篆』、蓋通不與白同時、此碑後來追建爾。歐陽公『集古録』云『通在陽冰前者、誤也。』とある。

〔三〕版本目録は南宋・尤袤の『遂初堂書目』にはじまり、晁瑬『晁氏宝文堂書目』、錢曾『述古堂書目』、同『讀書敏求

記、黄丕烈『士礼居藏書題跋』、同『堯圃藏書題識』など明清に盛んになった。また、于敏中等『天禄琳琅書目』は、宋明等版本、鈔本の別を分かち、版刻、藏書印にまで検討を加え、精密さを加えた。

第十三段（制書は尊ぶべきこと）

【原文】

十三曰制書宜尊^{〔注二〕}。列聖寶訓・五朝實錄・巡幸盛典・蕩平方略^{〔注三〕}、一切尊藏史成者、不分類別、但照年月先後、恭編卷首。

【訓読文】

十三に曰わく制書は宜しく尊ぶべし。列聖の宝訓・五朝の実録・巡幸の盛典・蕩平の方略、一切の史成に尊藏せらるる者、類別を分かたず、但だ年月の先後に照らして、恭しく巻首に編む。

【現代語訳】

第十三に制書は尊ぶべきこと。天子の詔諭、五朝の実録、巡幸の盛儀、平定の計略など、皇史宬に尊藏さ

れている一切は、類別を分けず、ただ年月の先後に従って、謹んで巻頭にまとめて置くこととする。

【訳注】

〔一〕「史籍考総目」を参照。「史籍考」が手本とした「経義考」では「御注勅撰」が、姉妹編ともいふべき「小学考」では「敕撰」が、それぞれ首巻におかれている。このような措置は、楊士奇『文淵閣書目』が巻頭に「国朝」の二類を設け、御製・勅撰・政書・実録を著録したのを先蹤とし、焦竑『国史経籍志』は御製・中宮御製・勅修・記注時政からなる「制書類」を置き、孫能『内閣藏書目録』は「聖製部」を設けるなどして引き継がれた。

〔二〕内藤湖南旧藏鈔本では、列聖寶訓・五朝實錄・巡幸盛典・蕩平方略の各句は行を改めている。

第十四段（禁例は明らかにすべきこと）

【原文】

十四曰禁例宜明。凡違礙書籍、或銷毀全書、或摘抽摘毀。其摘抽而尙聽存留本書者、仍分別著錄。如全書銷毀者、著其違礙應禁之故、不分類別、另編卷末、以

昭功令。

【訓読文】

十四に曰わく禁例は宜しく明らかにすべし。凡そ違礙の書籍、或いは全書を銷毀し、或いは摘抽し摘毀す。其の摘抽せられて尚お本書を存留するを聴^きざる者は、仍お分別して著録す。全書銷毀せらるる者の如きは、其の違礙にして応に禁^ずべきの故を著し、類例を分かつ、另に卷末に編み、以て功令を昭らかにす。

【現代語訳】

第十四に禁例は明らかにすべきこと。すべて（朝旨に違反する書籍は、全書を焼却したものと、部分的に残して（さまたげのある箇所を）取り除いたものがある。部分的に存留を許されたものは、やはり分類の上、著録することとする。全書焼却処分のもはその違碍と禁すべき理由を著し、類例ごとに分けることはせず、別に卷末にまとめて置いて（学問における）規準を明示することとする。

第十五段（採集は詳細にすべきこと）

【原文】

十五曰採摭宜詳。現有之書、鈔錄敘目凡例。亡逸之書、搜剔羣書紀載、以及聞見所及。理宜先作長編^{〔注二〕}。序跋・評論之類、鈔錄不厭其詳。長編既定、及至纂輯之時、刪繁就簡、考訂易於爲力。仍照朱氏『經考』之例、分別存・軼・闕・與未見四門、以見徵信^{〔注二〕}。

【訓読文】

十五に曰わく採摭は宜しく詳らかにすべし。現有の書は、叙目凡例を鈔録す。亡逸の書は、羣書の紀載、^{および}聞見の及ぶ所を搜剔す。理として宜しく先ず長編を作るべし。序跋・評論の類、鈔録するに其の詳なるを厭わず。長編既に定まれば、纂輯の時に至るに及び、繁を削り簡に就き、考訂も力を為すに易し。仍ねて朱氏『經考』の例に照らし、存・軼・闕と未見との四門に分別して、以て徵信^{しめ}を見す。

【現代語訳】

第十五に採集は詳細にすべきこと。現存する書物は、叙目、凡例を抄写謄録し、亡逸した書物は（それに関する）群書中の記載や見聞の及ぶところを搜集、摘録するが、道理としてはまず長編を作るべきである。序跋・評論の類は抄写謄録に当たって、その詳細さを厭わない。長編ができていれば、編集の段階に進んだ際、繁を削り簡に就き、考訂がしやすくなる。やはり朱氏の『経義考』の例にならって、存・軼・闕・未見の四つに区分し、拠り所を示す。

【訳注】

〔一〕長編とは書物編纂にあたってまず搜集した諸資料を整理し、編年したものを用いる。李燾「進統資治通鑑長編原表」には、「臣竊聞司馬光之作資治通鑑也、先使其寮探披異聞、以年月日為叢目、叢目既成、乃修長編」とあり、司馬光が「資治通鑑」編纂に先だって長編を作ったことが記されている。

〔二〕『経義考』の、存・佚・闕・未見について、孫詒讓「温州経籍志叙例」は、「目錄における存佚の区別は唐・釈智昇『開元釈教録』を嚆矢とする。朱氏は旧来の規範に従いつつ四区分を増した。存、佚のほか、闕は、篇簡が俄に依けて完本が存在しないもの、また、未見は、収蔵は絶えて

はいないが入手の難しいものである。四者は明確に区別されており検討の際大変便利である。」という。総論の注八も参照。存佚については次号掲載予定の「史籍考釈例」により詳細な言及がある。

（担当 渡邊）